

65 おおぐち 大口古墳群

— 青谷平野の前期小型古墳群 —

所在地

鳥取市青谷町大坪字大口

立地

日置川中流域の左岸にある丘陵上に位置する。東西方向に派生する幅 50 m ほどの尾根上に立地する。

時期

古墳時代前期

発見と調査

大口第2遺跡として、1987～88年（昭和62～63）にかけて、牛舎建設用地の造成工事に先立って発掘調査された（文献4）。

遺跡の種類

木棺、箱式石棺を埋葬施設とする小型方墳群。

遺構と遺物

古墳群は、全体で20号墳まで確認されているが、発掘調査されたのは、6号墳～16号墳までの区間で、調査によってSX07～SX15まで9基の古墳が確認された（図1）。SX07～SX10までは尾根の緩斜面部に位置し、尾根筋を横断する溝で墓域を区画するだけの台状墓状のもので、墳丘はもたない。SX11以降は、尾根平坦面をコ字形に囲う溝を設ける小型低方墳である。やはり、ほとんど盛土をもたない。

SX07は、長さ10m、幅0.6mの直線的な溝によって画された平坦面に3基の箱形木棺が検出された。木棺の規模は、最大の1基が長さ2.7m、幅0.6mで、残りの2基は長さ約2m、幅0.5m～0.7mである。副葬品などはなく、区画溝から鼓形器台や甕、複合口縁壺などが出土した（図2-1～4）。

SX08は、長さ8.4m、幅1.2mの直線的な溝によって画された平坦面に2基の箱形木棺が検出された。SX07と異なって、幅広い墓壇を伴っている。中心埋葬は、長さ2.3m、幅0.6mの箱形木棺で、棺内北側に鼓形器台を転用した枕があり、刀子1点が副葬されていた（図2-24～26、図3-93）。

SX08の区画溝であるSD08からは、多量の土器が出土した。鼓形器台、小型高坏型器台、高坏、低脚坏、直口壺、

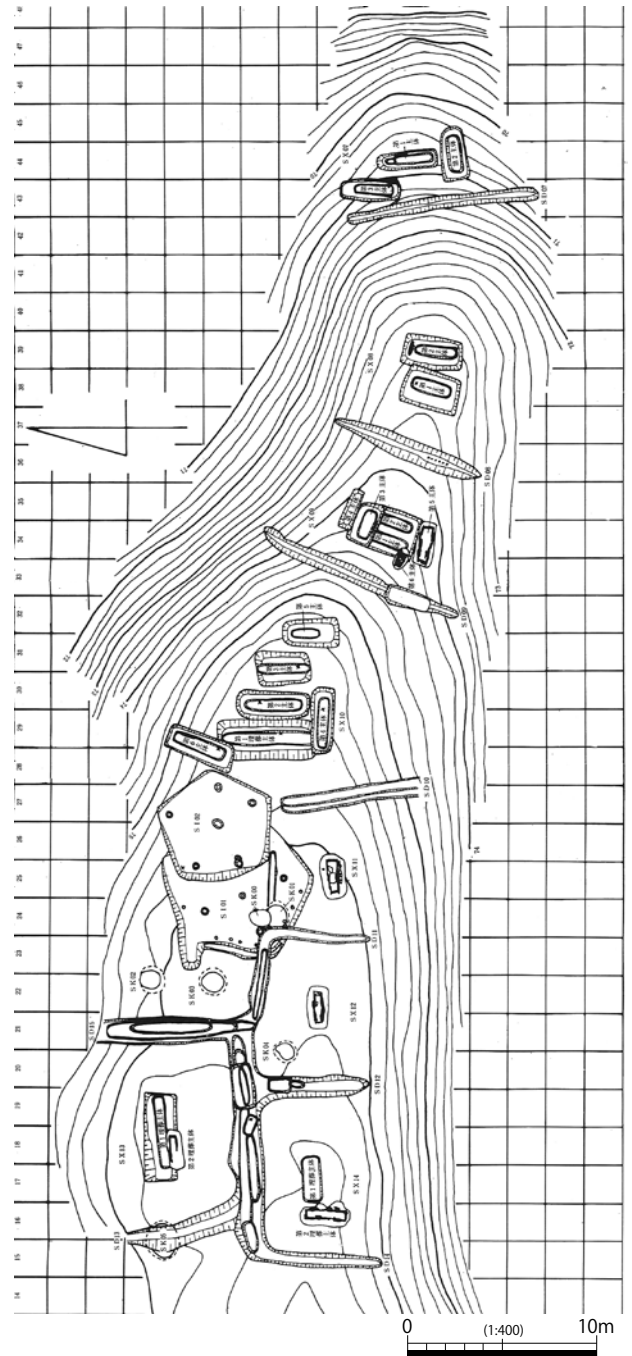


図1 大口古墳群の遺構配置 (1/400)

広口壺、甕があり、器種も豊富で埋没の同時性も確かなため、編年上重要な一括資料である（図2-5～23）。鼓形器台は径が20cm前後でやや大きく、高さが10cm以上あり、小型化が進む以前の姿を止める。直口壺は口縁部が長く伸びて新しい様相を示すが、複合口縁部のつくりはシャープである。他の器種も総じて古相の段階の特徴をとどめるため、前期中葉に位置づけることができる。

SX09は、長さ11.3m、幅0.8mの直線的な溝によって画された平坦面に4基の箱形木棺と2基の箱式石棺が検出された。墓壇の切り合い関係から、石棺が後出す

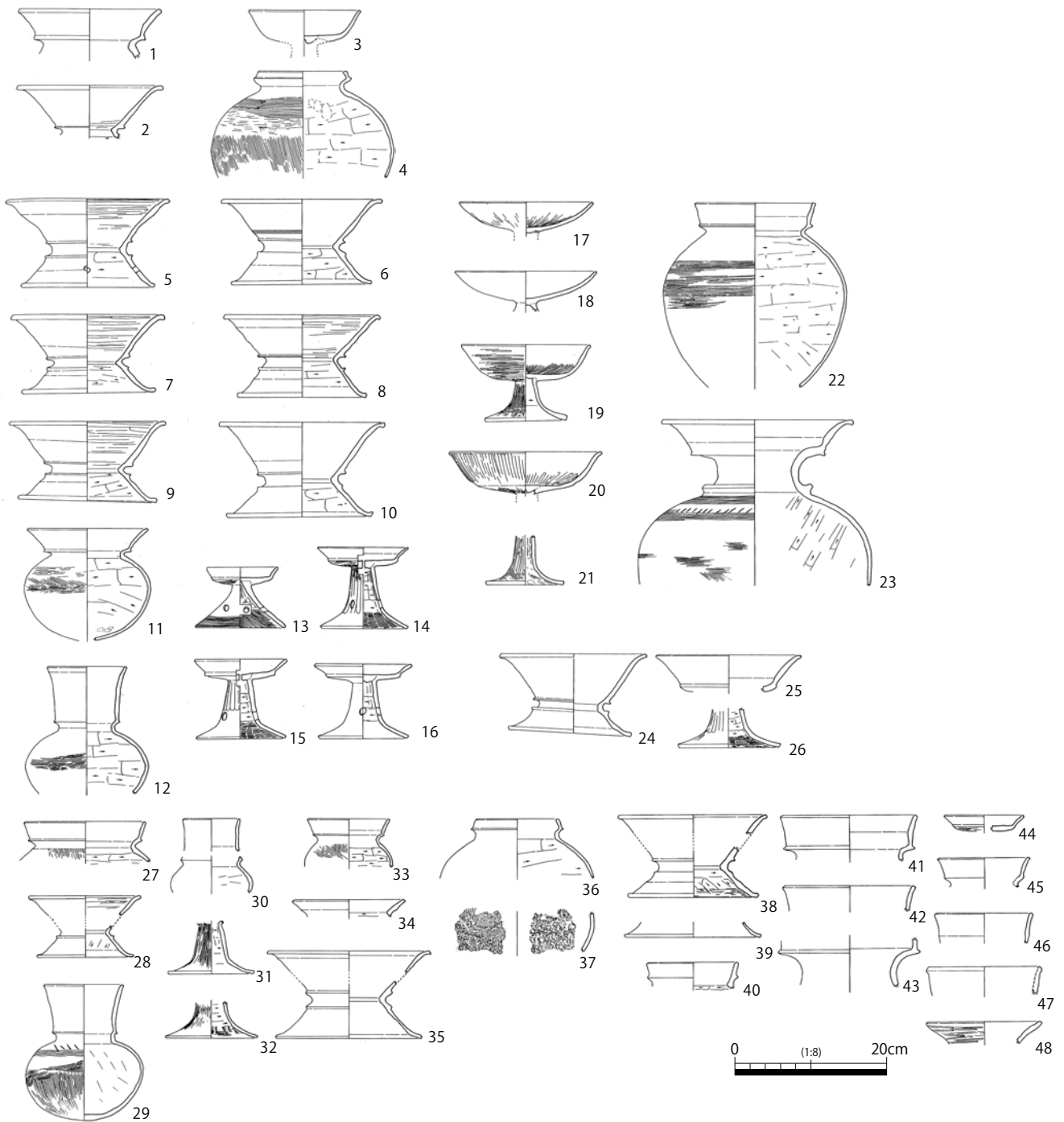


図2 大古墳群出土土器 SX-07～SX-10

る。供献土器は少ないが、鼓形器台は小型化し、直口壺もシャープさを失っているから、SX08に後出する墳墓と考えられる。

SX10は、SX07から続く尾根斜面が平坦面に移行する部分に立地する。墓域の西側に区画溝SD10があるが、弥生時代後期後葉～終末期の竪穴住居と重複するためか、尾根を横断する長さでは検出されていない。埋葬施設は6基の木棺が検出されており、本古墳群の中では最も豊富な副葬品を持っていた。

最も大きな第1埋葬施設は、4.9m×2.3mの墓壇内に長さ4.6m、幅0.8mの平面形が船形を呈する木棺が納められていた。「舳先」は北に向けるが、頭位と考えられる南側に素環頭刀子と鉋があった。素環頭刀子は、現存長23.5cmを測る(図3-91)。茎の一部を細長く棒状に加工し、背側に折り曲げて環頭部を作るもので、豊島直博がⅢ式と分類するものである(文献2)。青谷上寺地遺跡で環頭部の破片があり、鳥取市服部18号墳や豊岡市立石101号地点で出土するなどして、Ⅲ式は山

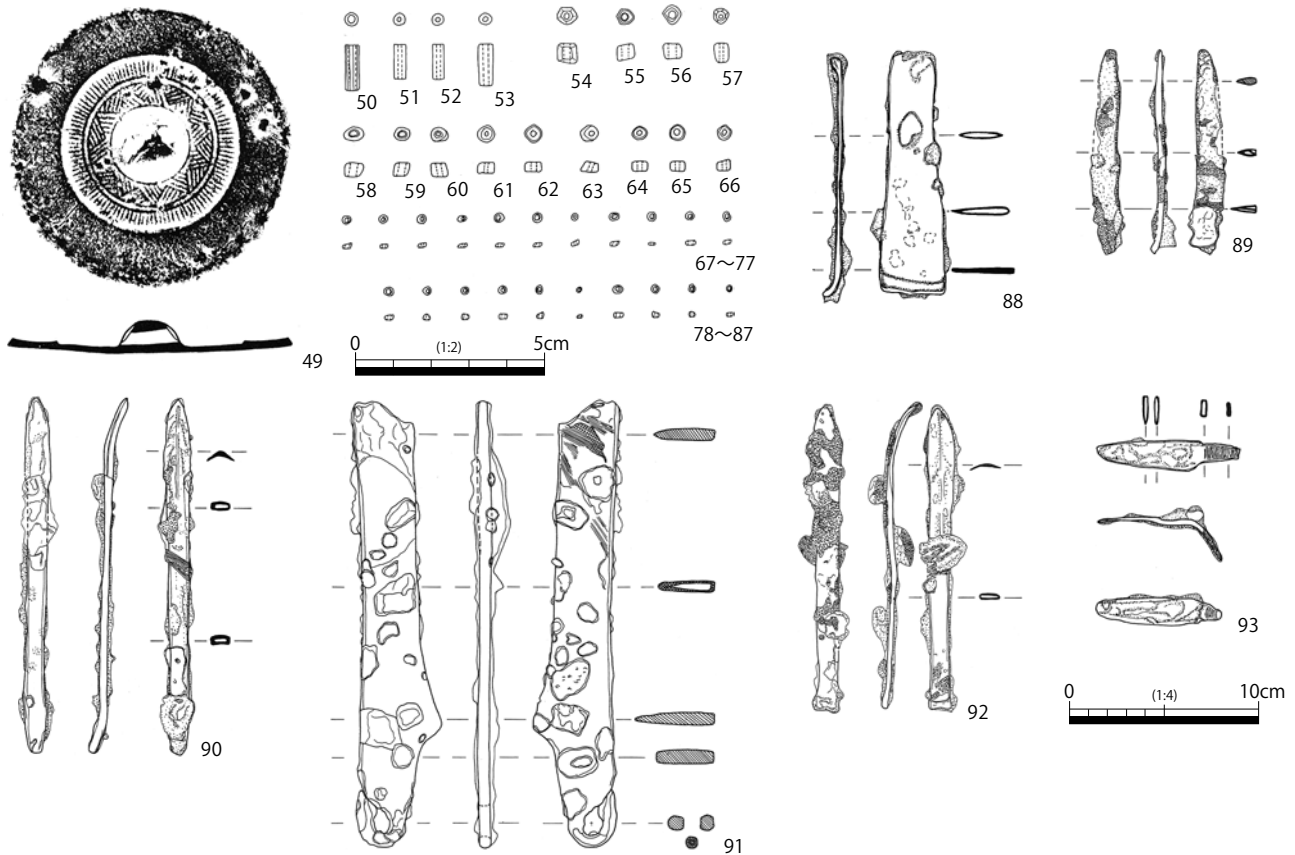


図3 大口古墳群出土遺物 SX-07 ~ SX-10

陰東部地域に類例が偏るため、弥生時代終末期～古墳時代前期にかけて当地で製作されたと考えられる。鉦は、長さ16cmで古瀬清秀のI a類にあたる(文献3)。

墓壇内には、供献土器が落ち込んでおり、比較的多様な器種が見られるが、破片が多く器形の詳細が不明なものも多い。鼓形器台は大型であるが、直口壺は小型でSX09のものよりもさらに新しい段階と考える。

第2埋葬は、墓壇の切り合い関係から第1埋葬よりも先行すると考えられたが、規模は小さい。3.9m×1.5mの墓壇内に長さ3.2m、幅0.8mのやはり平面形が船形を呈する木棺が納められたと考えられる。長さ18.5cmのI a類鉦が1点出土した(図3-90)。

第3埋葬以下は、細部にバリエーションがあるものの基本的に箱形木棺を採用している。棺規模は先行する船形木棺よりも劣るものの、刀子(第3埋葬)、鏡と玉類(第4埋葬)、鎌(第6埋葬)などの副葬品を持つ(図3-49～88)。第4埋葬の鏡は、径7.5cmの複合鋸歯文をモチーフとする仿製鏡である。鏡の下に広葉樹の葉が数枚あったという。文献4に掲載された写真で、網状葉脈と鋸歯

縁から判断すると、ニレ科のケヤキまたはムクと考えられる。ムクであったとすれば、鏡面の研磨に用いられた可能性も考えられ、興味ふかい事例となる。玉は、緑色凝灰岩製と考えられる管玉とガラス小玉で、ガラス小玉は大小2種類からなる。

SX11～15は、コ字形に溝を巡らす小型低方墳で、SX10より西の平坦面上に立地する。これらは、箱形木棺ないし箱式石棺を主要埋葬施設とするが、副葬品はなく、供献土器も個別の墳墓に伴う形では存在せず、器種も、量も少ない(図4)。そのため、築造順がよくわからないが、以下のような推測が可能である。

各墳墓は、互いに溝を共有する部分もあるが、溝の切り合い関係によって、SX15はSX12よりも先行し、SX13はSX14よりも先行することがわかる。SX15は、堅穴住居との重複によって埋葬施設がよくわからなかったが、木棺と考えられた。SX13、SX14の先行する埋葬施設も木棺で、箱式石棺が後続している。これらに対して、SX12、SX11は箱式石棺のみの単数埋葬である。

以上を総合すると、SX15ないしSX13が先行し、

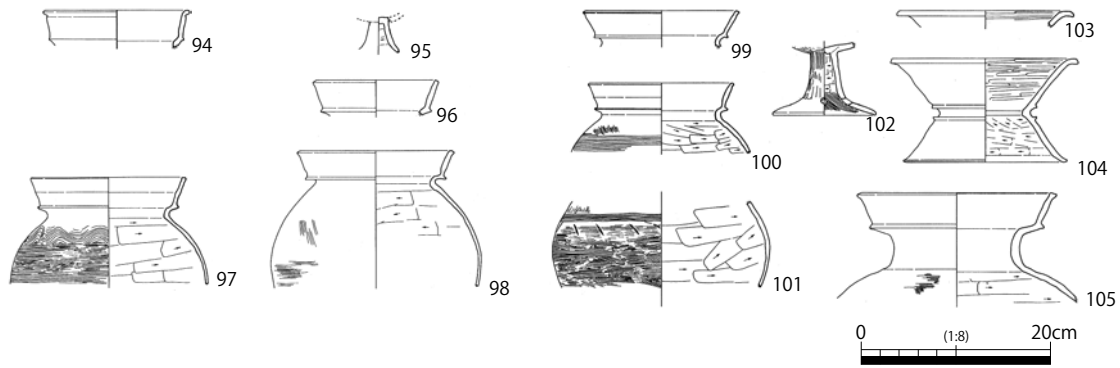


図4 大口古墳群出土土器 SX-11～SX-14

SX14、SX12、SX11 というように、互いに隣接する墳墓に連続的に展開した可能性が考えられる。そうした中で、埋葬施設が木棺から石棺へと変化していったと考えられる。

大口古墳群の箱式石棺は、清家章の研究を参考にすると、SX09 第5埋葬、SX12 第1埋葬、SX13 第2埋葬、SX14 第2埋葬が「ロ字形」・無底石タイプ、SX11 第1埋葬が「ロ字形」・有底石タイプ、SX09 第6埋葬が「H字形」・有底石タイプであり、「ロ字形」タイプが主流となる中に、少数の「H字形」や、有底石タイプが存在する（文献1）。

県内の箱式石棺の調査事例では、例えば鳥取平野では「H字形」・無底石タイプが多くを占めるが、これは、基本的にはその地域に主流の木棺の形状を踏襲しているからである。大口古墳群で「ロ字形」タイプが主流となることは、鳥取平野の主流とは異なる棺の伝統をもった人々がいたことを示唆するものであろう。その意味では、SX10 の船形木棺など、当地の古墳時代では類例の少ない木棺を採用することも関係するかもしれない。

また、少数派となる石棺型式の採用は、他地域との交流を物語るものとしても注意される。特に、箱形石棺に底石を敷くものは、畿内南部では主流派であるが、播磨や但馬では少数派であるという（文献1）。山陰でも同

様と考えられ、類例の分布の検討が必要であろう。

特徴と意義

大口古墳群は、小型古墳群ながら、木棺墓から箱式石棺を採用する過程、集団墓が分解して個人墓が成立する過程を具体的に示す資料として非常に重要である。

個々の出土遺物も、土器編年上の重要な一括遺物や地域性の検討に有効な資料を含み、意義深いといえよう。

現状と遺物

古墳は、調査後破壊されて現存しない。出土遺物は、鳥取市教育委員会で保管されている。

文献

1. 清家章 2001 「畿内周辺における箱形石棺の型式と集団」『古代学研究』152 pp.1-18
2. 豊島直博 2005 「弥生時代における素環刀の地域性」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室 pp.227-245
3. 古瀬清秀 1991 「農工具」『古墳時代の研究』8 古墳Ⅱ 副葬品 雄山閣 pp.71-91
4. 松下利秀 1989 『大口遺跡群発掘調査報告書（大口第2遺跡）』青谷町教育委員会

（高田 健一）